

---

# 血涙 My Summer

青春太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血涙 My Summer

### 【Zコード】

Z5681J

### 【作者名】

青春太郎

### 【あらすじ】

この世界に起る怪奇現象の原因『歪み』を破壊する。

それが僕の仕事であり、使命であり、運命だと思つ。

この話は僕と事務所の方々と二人の姉妹の血と涙の夏の物語。

## 第一章『出会いは依頼』（前書き）

春に僕の人生を変える壮絶な出来事が起こった。  
それは悲しく儚い一時の思い出になつた。  
そしてこれから始まるのは一人の人間の血と涙の夏の物語。

## 第一章『出会いは依頼』

頬からいくつもの汗が流れる。

今日は今年で一番の猛暑らしい。

僕の歳は18歳。普通なら高校に行っている歳なんだけどある事情で高校は中退。

今、僕は町でも知る人は少ない神社に向かつていた。  
木のおかげで影があるため周りよりも涼しく影からは出たくない気分だがそう言う訳にもいかなかつた。

「確かにこの辺りだと思うんだけどな」

誰も居ない古びた神社に目を向けながら呟いた。

神社の近くには大きな松の木が立つていた。

僕が産まれる何百年も前からあつたであろう松の木は今は蟬に泣き場所を与える存在になつてている。

ふと、松の木の横の木々に目がいく。

「視つけた」そこには何もない木漏れ日のある涼しげな場所に普通の人にはそう見えるはずだ。

でも、僕は普通じゃない：

立ち止まり目の前の『歪み』に触れる。

そう、世界の『歪み』に。

『歪み』とは神様であつたり、悪魔であつたり、妖怪であつたり、幻獣であつたりと多種多様の世界にとつての異質な者の入り口。それは人を幸福にするものもあれば、不幸にするものもある。その『歪み』を無くすのが僕の仕事。

「これだけ小さければこれで大丈夫かな」

事務所支給品の変な柄の御札を『歪み』の地面に貼り付ける。

「よし。終わり」

普段よりも大きな音量で言い、ポケットから仕事用の携帯を取り出

す。

ダイヤルをして3「一ル目

「…あ、もしもし……仕事してましたか？『歪み』を発見したんで  
一応、閉じときましたから、リストに追加しといてください。……  
依頼の迷子の猫？僕達の仕事は『歪み』を無くすことでしょう。……  
…それだけじゃ食つて生けない？知りません！…寝るなこりー。  
…お願いします」

仕事用なので通話料は取られないからかなりの長電話。  
携帯をしまいつつ神社の石段を下っていく。

そういうえば仕事場の看板は探偵事務所だったかも知れない。  
やれやれ就職するところ間違えたかな。

階段を下り終え停めておいた自転車にまたがり、いざ！発し -  
「新宮君？新宮君だよね？」

かん高い声が僕の競輪選手すら恐るスタートの邪魔をする。  
嘘ですけどね。

聞き覚えのある声に振り向くとそこには制服を着た腰もあるようなロングヘヤーの女性がコチラに微笑みかけていた。

「こたなどこで何してるの？」

もう一度言おひ。

僕は高校中退……

ここで「野火 陽華」について話したいと思つ。

彼女は僕が去年まで通っていた高校の三年生で本来なら僕と同級生だ。

確かに部活動はしておらず一年の時は一緒に図書委員をしていた記憶がある。

成績はかなり良く期末テストでは全教科学年10位以内だったと思う。

そんな優等生が僕の目の前に立っていた。

「お久しぶりですね野火さん。学校はどうしたんですか？」野火さんの質問を無視してコチラが質問してみる。

「今日はテストだったから午前中までだつたの。それよりも、ここで何してたの？」

再び同じことを聞いてくる。

「どうしようかな。できれば言いたくないしな。

「野火さんこそこんなところで何してるんですか？」つと誤魔化してみる。

「私の帰り道はこつちなの。いい加減、私の質問に答えてよ」

野火さんは少し声を荒げて言った。

言うしかなさうなので仕方なく自分の懐から名刺を取りだし、手渡す。

「中々探偵事務所。新宮君、探偵しているの？」

だから、嫌なんだよ…

「まあ、探偵と言つよりも何でも屋みたいなものです」

「それでもす」いよ。驚いたな。もつ将来の道決まつてゐなんて尊敬するわ

そんな輝いた眼で見られると心が痛い。

僕だつてしたくて就いた職じゃないのに。

「それだつたら一つ相談していい？」

いまだに輝いた眼で見て話していく。

「大体分かる。これはめんどうかい事件を持つてこようとしている。そんな感情を顔にだしてみようとしたがうまくできなかつたのか、察してくれなかつたのか、話を進めてくる成績優秀者。

「最近ね、目が悪いのか分からんだけど時々視野がぶれる」とあるの

「ぶれるって空間が吸い込まれた様に見える？」

「うん。よくわかつたね」

ほらね。やつぱり事件が起こった。

空間が吸い込まれた様に見えるのは『歪み』が視えていると同じことだから。

まあ、それが仕事だから眞面目にやるべきだよね。  
思いながら彼女に、これまた事務所支給品の特製お守りをプレゼン

ト。

「なにこれ…。こんなので治るの？」

「こんなのは失礼な。普通に買えば一万円は超える品物ですよ  
テレフォンショッピングぼく言ってみた。

野火さんは「嘘おーー！」とか驚嘆の声を出していた。

「で、何時から見えるようになつたんですか？」

少しだけ腰を入れて仕事をしてみる。

「えーと。5日前ぐらいかな」

5日前か…。ぎりぎりだつたと思う。もう少し遅ければ『歪み』の  
事件に巻き込まれていたかもしれない。

「うん、わかった。ありがとう。そのお守りを絶対に肌身離さず持  
ついたら、大丈夫だと思つよ

自分の仕事を減らす為にも詳しく説明をしておく。

「じゃあ一応信じとくね。あつー料金は幾らぐらい？」

「効果が現れてから請求するよ

話が長引いて体内温度が高くなつてきたので早めに話を終わらそう  
としてみる。

「そう? だつたら携帯の番号教えて・

「バイバイ野火さん!」

自転車にまたがり強くサドルを蹴り一気にスピードに乗る。  
人との関係を深く持つなんてまつぱら御免だ。

「新富君ー！」

大声で後ろから叫んでくる。

暑いのに元気な人だ…。

「これから私のことは陽華つて呼んでねー！」

聞き間違えがなければそう聞こえた。

なんでだろう？僕は親しくなるようなことをしただろ？

中学一年のように話してきた女子がみんな自分に好意を寄せている  
と思っている状態に入り込んだ。

まあ、冗談ですけどね。

そんなことを考えていると自転車が自分の働く事務所に到着した。

事務所は二階建てになつており一階のガレージに自転車を停め、錆  
びきつっている階段を上り始めた所で思い出した。

野火 陽華には双子の妹がいたんだつた。

## 第一章『出会いは依頼』（後書き）

誤字が酷かったので直させてもらいました。  
すいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5681j/>

---

血涙 My Summer

2010年10月9日06時33分発行